

# 花ふぶき生死のはては知らざりき — 里海<sup>さとみ</sup>の世界

## 石牟礼道子さんインタビュー

聞き手 | 鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)  
Toji KAMATA



石牟礼道子 (いしむれ・みちこ) 1927年、熊本県天草郡に生まれる。1969年、『苦海浄土 — わが水俣病』刊行、文明の病としての水俣病を魂の文学として描いた作品として高く評価される。1973年マグサイサイ賞、1986年西日本文化賞、1993年紫式部文学賞(『十六夜橋』)、2001年度朝日賞、2002年度芸術選奨文部科学大臣賞(『はにかみの国 — 石牟礼道子全詩集』)、2014年、第32回現代詩花椿賞(『祖さまの草の邑』)を受賞。2002年、新作能「不知火」を発表、東京、熊本、水俣で上演された。2004年から2014年、『石牟礼道子全集 不知火』(全17巻・別巻1)、2009年から2010年『石牟礼道子・詩文コレクション』(全7巻)、2015年『石牟礼道子全句集 — 泣きなが原』刊行。また、石牟礼道子の世界を描いた金大偉監督の映像作品「海霊の宮」(2006年)、「花の億土へ」(2013年)がある。

## 泉を掘る言葉

鎌田 私は夏休みに『石牟礼道子全集』を全部読もうと思って買いました。しかし、東北の被災地を回っているうちに、左目が網膜剥離になり、手術をしなければならなくなりました。それで2週間ほど、病院のベッドに伏せたまま、妻に『苦海浄土』の第1部、第2部、そして第3部の途中まで読んでもらい、目が治ったので途中から自分の目で読みました。

石牟礼さんは非常に鋭くつかんでいて、記録も含めて、綿密に、きちんと言葉にされているので、学問的な見地から言っても、文学的な見地からしても、とても優れた深いものを書かれていると思いました。

石牟礼 お恥ずかしい。何も知らないもので、とりあえず思ったことを吐き出さなければと思って書きました。

鎌田 何も知らないで書けるような言葉ではないと思います。とくに2000年代になって謡の脚本『不知火』という新作を書かれていますね。あれは日本文学の伝統を踏まえた見事な言葉のつづれ織りで、その感性や、詩的なイマジネーションは、すごいと思いました。

『苦海浄土』は、特に熊本弁で物語っている漁師さんや地域の人たちの言葉や、東京に出て行って訴えていくときの言葉1つ1つが、くっきりと映像として立ち上がって見えてきました。ずっと目をつぶって聞いていますから、映画のように動いている感じでした。

『苦海浄土』を読んで、鶴見和子さんが、「石牟礼道子がアニミズムそのものなのよ」というのも非常によく分かりました。

また、『石牟礼道子全集』第1巻に初期詩篇が収められています。水俣病のことが大きくなっていく昭和30年代に、石牟礼さんが書かれている言葉は、ぐさりと胸に突き刺さってきました。その詩の中で、自分はみんなのための泉を掘るというふうなことを書かれています。石牟礼さんがされている取り組みとは、まさに泉を掘って、みんなに命の水をもう一度飲んでもらう。そして、終わりかけている何ものか、命の最期のあえぎみみたいなものを看取りに行っている。そういう感じを強く持ちました。詩としても、すごく胸に迫るものがありました。

石牟礼 そんなふうを読んでいただけるとはありがたいですね。約50年間、脇目もふらず、間に合わないと思って無我夢中で書いてきました。

## 山の生き物と海の生き物のつながり

石牟礼 私の家は、いまでも水俣川の川口にあります。川口というのは海と接しています。川口の続きは海で

すよね。小さいとき、チッソ<sup>1)</sup>のそばの町筋の栄町から没落して、海辺のとんとん村<sup>2)</sup>に移った。それは猿郷<sup>3)</sup>というところですよ。実際、時々サルが出てきました。

そのころは、まだ海辺をコンクリートで固めていませんでしたから、海辺に行きますと潮が引いているのが分かります。15日単位で、大潮、小潮と言って、小潮のときは浅く潮が満ちてくる。大潮のときは、うんと沖まで引いて、干潟が出てきます。これは『不知火』に書いていますが、干潟が多いです。そうしますと磯ものがたくさん出てくる。いろいろな貝類が出てきます。

水俣病の研究の資料となったムラサキガイは、岩の裂け目にびっしり重なって付いていて、これを取って、おみおつけにしていました。梅雨のころがいちばん大きくなる。海で洗ってきて、そのままおみおつけに入れると、とてもおいしい。

鎌田 それは海辺の人たちの日常的な食べ物だったんですね。でも、ムラサキガイは定着しているから、よけいに水銀をため込んだ。

石牟礼 水俣病の初期の研究者たちは、これで研究をしていました。

鎌田 それを日常食にしている人たちに被害が大きかった。

石牟礼 そうです。それからイワガイというのがあります。これはひだがありましてね。これをゆでて、塩をひとつまみ入れて、身を取ります。そしてあくる日、貝ご飯をつくるんです。貝に味を付けておいて、それを温かいご飯に混ぜて食べるとおいしい。

鎌田 聞くだけでもおいしそうですね。水銀さえ入っていなければ貝は最高ですね。

石牟礼 最高です。

鎌田 今回の私たちの雑誌の特集テーマは「里山」です。石牟礼さんは『花の億土へ』(2014年)の中で、海と山との連関、海の中にも里山があるというようなことを言われています。いまのお話を聞いていると、海の中のドンダの実を拾って食べるようなものですね。

石牟礼さんの世界には、『しゅうりりえんえん』<sup>3)</sup>の狐がすんでいる山、しゅり神山<sup>4)</sup>とかも出てきますね。山の生き物と海の生き物のつながりをどう捉えておられますか。

石牟礼 渚には特殊な植物が生えています。海の潮を吸って生きている。たとえば、アコウの木というのがありました。

鎌田 その写真をちょっと見せてもらえますか。樹根が垂れていて、沖縄のガジュマルに似ていますね。

石牟礼 ガジュマルの仲間だと思います。

鎌田 沖縄のガジュマルはキジムナー(樹木の精霊)がすんでいますね。これは天草にあるんですか。



明神に生えていたアコウの木

石牟礼 水俣に入ってきたものが天草にもあります。海の潮が満ちてくるところに生えています。それを陸に持ってきて植えてもつかない。潮がないとだんだん枯れてきます。これはチッソの裏の明神というところに生えていました。ここは渚です。海と陸は呼吸合っていますね。

鎌田 そうですね。お互いにつながり合って、刺激を与えています。

石牟礼 それで海も陸も生きている。でも、今はそれができなくなりました。父は、コンクリートで石垣をつくるようになった時代に入ったとき、「日本は墮落するぞ」と言っていました。

鎌田 まったくそのとおりにになりましたね。いま、東北でも15メートルの防潮堤を造ろうとしています。底辺が80メートルですよ。こういうピラミッドみたいな巨大な防潮堤を気仙沼や石巻の近くなどにコンクリートでつくろうとしているんです。

私ももちろん反対をしているけれど、地元の人たちは、海を見ながら生活したい、海といっしょに呼吸をして生きていきたいのに、そんなことをすると呼吸を止めてしまうじゃないですか。だから、やめてくれと県知事とかに申し立てているんですけど、公共工事はお金が下りるものですから。水俣の問題も同じだと思うんです。土木建設業は、それによって潤うところがあるから、国も県もどんどん進めようというのが基本的な流れです。

気仙沼に<sup>はたけやましげあつ</sup>畠山重篤さんという、「森は海の恋人」というキャッチフレーズで運動をしている人がいます。畠山さんたちは、コンクリートの防潮堤なんかとんでもないと言います。

石牟礼 とんでもないですよ。

鎌田 これは海を殺してしまう。人間の生活圏も変えてしまう。コンクリートは日本列島を窒息死させます。

石牟礼 そうですね。そして、原子力発電所の汚染水をコンクリートの島みたいなのをつくって閉じ込めようとしているんですけど、閉じ込められるのは日本列島そのものですね。それでは日本列島は呼吸ができなくなります。

鎌田 本当ですね。石牟礼さんは、

毒死列島身もだえしつ野辺の花

という俳句を作っておられますが、まさに毒死列島のような状態ですね。コンクリートもそうだし、放射能や汚染水で取り巻かれているので、そういう意味では、呼吸もできないし、どんどん毒素がまわって死にかけているような状態ですね。

石牟礼 はい。それで「毒死列島」と名付けたんです。

鎌田 そこに花を咲かせたいですよ。

石牟礼 川と海は行き来がありましたよね。いま、それができなくなっています。川の上流では、木のこずえがあつて……。

鎌田 その木のもとに小動物がいて、花が咲いて、鳥や蝶がやってきて、花粉を飛ばして……。

石牟礼 1本1本の木が、川の源流ですね。

鎌田 「森は海の恋人」という運動の人たちも、同じようなことを言われていました。1本1本の木が水の源にあつて、海に会いにいくというか、海に流れ込んでいって、森と海が抱擁し合っているような感じ。

## 「道路道楽」

石牟礼 私の家は石屋で、祖父や父は石工でした。水俣の八幡というところに八幡神社をつくることになって、わが家が鳥居を請け負いました。

鎌田 おじいさんが、その鳥居を建設されたんですか。

石牟礼 1人じゃありません。親友と3人で大鳥居と2頭のこま犬をあげています。いまも「吉田松太郎」と祖父の名前を刻んだものがあります。不知火海（八代海）の東シナ海への出口に長島という島があります。その島の山に入って大鳥居の原石を見つけたのだそうです。あれは1本1本山で切って鳥居の柱の形にして運び出すので、よっぽど大きな岩じゃないとできない。

鎌田 コンクリートが出てきて、お父さんが、日本はこれから墮落すると言われた。それはいつごろのお話ですか。

石牟礼 私がまだ学校に行かない、小さいときです。

鎌田 昭和10年代でしょうね。そんなところに、すでに日本は墮落すると。

石牟礼 はい。祖父も父も道路工事が大好きでした。親類やまわりの方は「道路事業」とは言いません。「道路道楽」と言っていました。

鎌田 「道路道楽」。道路をつくるのが楽しいという。

石牟礼 「人は一代、名は末代」というのが晩ご飯のときの話題でした。でも、もうけ道を知らない。もともと天草に住んでいましたが、水俣に山をたくさん持っていて、その山を片っ端から売ってしまった。「また山を売って道をつくるのかい」と天草の親類たちが言うんです。「山を道に食わせてしもうて」。それでとうとう持っていた山がなくなってしまったんです。

鎌田 道をつくることは寄付しているようなものだったんですか。

石牟礼 そうですね。請け負った道はたくさんできました。それは残っています。湯出<sup>湯のつる</sup><sup>5)</sup>という山の温泉がありますが、そこに行く道もわが家がつくりました。

鎌田 おじいさんやお父さんは、村や市のために公共事業的なことをたくさんされたんですね。

石牟礼 自分の道楽のために。

鎌田 でも、道をつくるということは人のためにもなったわけですね。

石牟礼 そうですね。道をつくるには根石、土台石がいちばん大事と言っていました。松太郎は石を見つける名人だったそうです。

鎌田 土台石がいちばん大事だというのは人間も同じですね。

石牟礼 雨が降ればすぐ壊れるような土手をつくるのは末代の恥、と言っていました。

鎌田 道路も生き物だということですね。風雪に耐えて長く生きられるか、すぐに壊れてしまうか。それは昔の人が自然の摂理から学んだ人間教育ですね。

石牟礼 そうですね。湯出に行く道をつくったときは、途中で村が3つぐらいあったんです。道をつくるのに石垣を積みまなきゃいけないので、石方の人たちをお願いしなければならない。どうやって石方を集めようかと思いつきながら村に入っていくと、村の段々畑の石垣がたいそう立派につくってあった。そこで、こういう村からうちに来ていただきたいと言って頼んで歩いた。それで湯出の道が出来上がったんです。

いよいよ今日は道が通り始めますという日に、あちこちの村から道を見物にいらっしゃったんです。誰が最初にその道に足を下ろすか。勇ましい人が、出来上がった道にそっと足を乗せようとしたんですけど、道に足を着けるのが怖くて飛び上がっていきなされた。誰も足を着ける人がいなかったそうです。

鎌田 その村の人の感覚はすごくよく分かります。道の渡り初めはそれぐらい神聖なものだったんですね。

石牟礼 それで、おばあさんたちがお祝いに、歌を歌って、踊りを踊って、板三線を引きながら行列をして通った。

鎌田 もう、お祭りですね。

石牟礼 道のお祭りです。松太郎は「それを見たときに道をつくったかいかがあったと思った」と言いました。

鎌田 それは最高ですね。神さまも人間も全部通じていく道、そういうものをおじいさんやお父さんがつくったということですね。

石牟礼 そうですね。「これがあるけん、道をつくることは、やめられん」と。

鎌田 おじいさんが石牟礼さんの「道子」というお名前前の名付け親ですか。

石牟礼 みんなで道子と付けたそうです。村中が寄って、お祝いしてくださったそうです。

鎌田 きっとそういうおじいさんの思いも込められているんでしょうね。人の道、獣の道、生き物の道、いろいろな道が続いていくようにという願いが。

石牟礼 はい。でも、いまのコンクリートの道はとてもそんな気持ちにならないですよ。

鎌田 命が通わない。むしろ、窒息させる道です。

石牟礼 そうですね。

鎌田 私は比叡山に1週間に1回登って、山頂で、うしろに宙返りするバク転をするんです。山に入っていくと、シカとかサルとかへびとかに出会います。そういう道は、もちろん完全に自然な、コンクリートの一切ない道です。その山の道は、汗をかいて登って下りてきても疲れないんですよ。疲れないどころか、元気になります。森のいろいろなものを感じて。森に、いろいろな友達がいるようなものですから。

でも、人間がつくったコンクリートやアスファルトは無機質で、窒息させるような、押しつぶしているような感じで、ものすごく歩きにくいし、疲れますね。

石牟礼 父は「墮落した」ってコンクリートを憎んでいました。

鎌田 本当にそう思いますね。道路もそうですし、築港作業も、波打ち際のところにテトラポッドを設置して、渚の呼吸を止めてしまっているわけです。日本列島全体を窒息させていくような動きを戦後、特に高度経済成長以降、作り上げてしまっています。

石牟礼 うちでは晩ご飯のとき、お客さまがいっぱい来ていっしょに食べていましたが、よく「道が花の道に見えた」と話していました。「花の道」というのが耳に残っています。

鎌田 花の道。美しいイメージですね。花の道というのはそこに生き物がいっぱいあるということですから、



石牟礼道子さん

命が通い合う道ということですね。

石牟礼 祖父は、地面に紙を広げて、筆を持って仏さまの絵を描くんです。それが立派に描くんですね。とても手が自由に動いていました。

鎌田 そんなにお上手なんですか。石工の棟梁さんですよ。きっと名人級だったんでしょうね。

石牟礼 名人級だったと思います。

鎌田 石牟礼さんのDNAの中には、そのおじいさんのDNAも、向こう側の世界にいるおばあさんのDNAも入っておられるので、おばあさんの精神世界と、おじいさんの現実的な技や、みんなのために大盤振る舞いしていいものをつくりたいみたいのところと、それらがそっくり引き継がれているのでしょうか。

石牟礼 多少、影響を受けているでしょうね。

鎌田 自分で自覚されている以上に、おじいさん、おばあさんの生きざまというか、息吹が受け継がれているんだと思います。

## 石と星

鎌田 これはアイルランドの石なんです。私はこれを毎朝、比叡山に向かって吹いています。私の聖なる三種の神器の1つです。これは自然に3つ穴が空いている。いまから20年前にアイルランドで拾ったんです。

(石笛吹奏)

石牟礼 すごい音。

鎌田 いまは迷惑になるので抑えています。ぴいっというもっと高い音になるんです。能管と同じような音です。

石牟礼 私も能管を思っていました。

鎌田 広島に原爆が落ちて50年目の日、アイルランドにいた私は広島に向かって祈りました。そのあと、アイルランドの西の果てのアラン島の海岸で、この石が「私を吹いて」と呼び掛けてきたんです。それで手に取って吹いたら、ぴいっという音が鳴りました。縄文人も自然に穴の空いた石を吹いていました。

石牟礼 驚きました。いまの音。

鎌田 アイルランドでも西の向こうには、「ティル・ナ・ノグ」という常若の島があると信じられています。ここにはアーサー王とか亡くなった英雄、死者の霊がいるといわれます。「ティル・ナ・ノグ」は古代ケルト語で、日本語に翻訳すると「常若」という意味です。

沖縄で言うニライカナイ。石牟礼さんの『不知火』にも常若という名前の弟が出てきますね。

私は『古事記』を小学校5年生のときに読んで、非常に印象に残っているのは「草木が言問う」ということです。祝詞の中に必ず出てくる言葉に「語問ひし磐根樹根立」、つまり岩の根とか草の片葉が言葉をしゃべるといのがあります。子どものころから、草木や岩がしゃべるといのに非常によく共感できました。

石牟礼さんの文学の世界は、『苦海浄土』から今日に至るまで、草木、空や風、すべてが物語るという世界ですが、とくに最近、石のことに関心を持っておられるようで、そのことをお聞きしたいと思います。

石牟礼 石というのは、宇宙の成り立ちの中でどういうものだったろうと思っています。最初は何か、宇宙の中のしずくのようなものだったかもしれない。それが、何十億年とか、さらに大きな数の時間があって、だんだん石が固まったとき、星になったと思うんです。父が、「星は地球と同じだ。誰か住んでいるに違いない」と言うでしょう。それに胸がときめくんです。

星はたくさんあるけれども、私たちが住んでいる地球も星の1つかと言うと、「そうだ。向こうの星から見れば地球は光って見えるに違いない」と言うんです。「何か人間に似たものが住んどるぞ。山もあれば川もある。海もあるに違いない」と父は言うんですね。

地球のことを「ジダ」と言っていました。ジダというのは土地のことです。「ジダは大事にせにゃあかん。何でも産んでくれる。人間も、生き物も、木も、ジダから生えているんだ。地球は息をしているんだ」と。

鎌田 ジダが息をしている。

石牟礼 はい。それはよく分かりました。「野菜ば植えれば生えてくるぞ。種ひとつまけば」と。私も小さいときから親のまねをして一応、百姓のつもりでやりましたから。それで、肥やしをやったり、水をやったりすると、成長して、実りの時期が来ます。

「地球」という言葉は使わなかったですけど、自分たちが生まれて、立って、歩いて、道をつくったり、家を建てたり、船をつくったり、海があったり、貝を取ったり、いろいろ生産活動ができるでしょう。「生産活動」という言葉は知りませんでしたけど、実り豊かな大地だと思っていました。

だけど夜になると、あの光る星に行き着くことができれば、そこには何か住んでいる。豊かな生活があるに違いない。行ってみたいなと思っていました。

鎌田 子どものころから、星を見ながらそんなふうに想像していたんですか。星が1つの島で、向こうには別の島があるような感覚ですか。

石牟礼 そうですね。そしてその星自体が生きている、呼吸をしている。そして遠い、光のように見える向こうの世界と呼吸をし合っているんだと思っていました。そう思うと、ところが豊かになるんですよ。

鎌田 そうですね。そこにはどういう生き物がいるとか、いろいろ想像されたんですか。

石牟礼 いろいろ想像していました。タコのようなものがあるかもしれないとか。

鎌田 昔、そんな姿の火星人がありましたね。

石牟礼 はい。だけど、私はそういう本はあまり読んでいないんです。想像でタコのような人間がいるんじゃないかって。足が何本あるだろうか。手も指もあるだろうか。目はいくつあるだろう、といろいろ想像するんですよ。家を建てて住んでるんだろうとか。

鎌田 言葉が通じるだろうかとか。

石牟礼 お芝居なんかもするだろうか。

鎌田 歌も歌うだろうかとか。

## 歌う人たち

石牟礼 うちでは焼酎が入ると歌が始まります。若い人たちもよく歌を歌っていました。

父の亀太郎はものすごく音痴でしてね。世界の音痴大会に出たらグランプリをもらうというぐらい、とんでもない声を出すんですよ。当時、『ストン節』<sup>6)</sup>というのがはやっていました。「♪ストン、ストンと通わせて」という。それをどんな名作曲家も考えつかないような節で、しかもすっとんきょうな声で歌う。

祖父の松太郎は声がよくて、『江差追分』をよく歌っていました。実にいい声で一条の乱れもなく。それで「真打」と言われていました。「松太郎さま、歌い申せなつて」と若い者たちが言う。当時のやり歌をみんなが歌って、真打に入る前に亀太郎に歌わせるんですよ。そうすると、いままで「人は一代、名は末代」とか堅苦しい話をしてきたのに、相好を崩して歌い始めるんです。それがもうとんでもない。まねができない



鎌田東二教授

(笑)。

鎌田 調子外れが。それは何曲か歌うんですか。

石牟礼 『ストン節』1曲だけ。でも、いつも違う。同じ節では歌わない。あれ、わざと歌っていたのかなと思いますけど。

鎌田 毎回違うというのはわざとでは歌えないですよ。だいたい似たようになっちゃいます。

石牟礼 若い者たちがお腹をかきむしって転げまわって笑う。それでごちそうのお膳などがお座敷いっぱい散らかるんですよ。それでも、お婆さんたちは手をたたいて喜んで。

鎌田 そういうときは石牟礼さんも歌ったりはしないんですか。

石牟礼 まだ子どもですから歌わない。

鎌田 『花の億土へ』の中に、お母さんと麦踏みに行ってお母さんが麦にいろいろ言葉をかけたり、歌うように祈ったりしながら、という話がありました。お母さんもよく歌われたんですか。

石牟礼 母も歌っていました。母は当時はやっていた娘義太夫になりたかったそうです。

鎌田 へえ。お母さんはとても美しい方ですね。娘義太夫で全国を行脚したかったのですか。石牟礼さんの中にも、そういうところがありますよね。

石牟礼 ありますね。当時はやっていた琵琶歌があって、「月に叢雲、花に風」という歌い出しですが、母は歌い出しのところだけを歌っていました。それから先は歌わないんです。

鎌田 ご詠歌ですか、それは。

石牟礼 『石童丸』という、もとは説経節から来た唄です。石童丸のお父さんが高野山に入るというので、お



水俣病患者の発生地域 (1972年、当時の地図・データによる)

石牟礼道子『新装版 苦海浄土 わが水俣病』(講談社文庫、2004年)より

母さんは止めたいけど、家族を捨てて、お父さんだけ高野山に入ってしまった。それで高野山の入り口まで親子でお見送りして、その別れるときの歌です。

## 御詠歌のお師匠さま

鎌田 『苦海浄土』の第2部「神々の村」の最後の章が「笑る子」で、水俣病患者巡礼団の人たちが高野山に行きついで、ご詠歌を歌う。おばあちが、「はかなき夢」というところをいつも「はかなき恋」と間違ってしまうところがユーモラスに、切なく描かれていましたね。

石牟礼 「♪……人のこの世は永くして 変わらぬ春と思えども はかなき夢となりけり」。ご詠歌は私も高野山に行くときに稽古に行きました。

鎌田 お師匠さんは、石牟礼さんはすごくご詠歌が上手だと言われていたんでしょう。そのおばあさんたちは、なぜ「はかなき恋」になっちゃうんですかね。

石牟礼 うちの母もそうでしたけど、小学校に行く年齢になっても行かない人たちが多かったんですよ。それで、童謡とか学校の歌も稽古したことがない。だけど、やはり歌は歌っていました。

鎌田 はやり歌の中に恋が出てくる。

石牟礼 はい。皆さん、恋の歌が好きでした。

鎌田 あれは『苦海浄土』の中に繰り返す象徴的に出てきますね。株主総会で歌ったときとか。高野山で歌

う場面はあの中では描かれていませんでしたけど、高野山に登ったとき、どこであのご詠歌を歌われたんですか。金剛峯寺というお寺の本堂ですか。

石牟礼 金剛峯寺のようなご大層なところには入れてもらえなかったの、外側で歌いましたね。

鎌田 高野山には根本大塔という、マンダラを掛けている赤い塔の建物と、お堂の金剛峯寺の2つがありますが、そのお寺の庭でご詠歌を皆さんで歌われたということですね。

石牟礼 はい。株主総会のとくと高野山に入らせていただいたとき、患者さんたちは白装束を着ておられました。私も患者さんとごいっしょの服装をしていました。途中は平服でしたけど。

実子というのは、お師匠さんが「いまの世の中は、逆さの世の中でござすばい。それで、子どもに実子と付けました」とおっしゃいました。だから、なかなかの人物です。

鎌田 あの「神々の村」のラストシーンは非常に印象的でした。お師匠さんの世界観と、おばあちの、非常に世俗的でありながら、聖なる世界と交わる、この聖と俗が両方ともうまく合って豊かな世界ですね。

石牟礼 あそこは書かなきゃと思って書きました。

鎌田 お師匠さんの言葉もたいへんところに染みてきます。子どもにその名前を付けた祈りというのか、ここが。

石牟礼 はい。たいへんな人でしたよ。

鎌田 もう、そのお師匠さんは亡くられていますね。

石牟礼 亡くられました。一家全員が水俣病にかかっておられました。

鎌田 いちばん重いのが実子さんですか。

石牟礼 実子さんの前に生まれた静子ちゃんは胎児性で生まれて亡くなりました。私は、ほかの家にはそれほど行きませんでしたけど、ご詠歌の稽古のこともありましたので、お師匠様の家にはしげしげとお見舞いに行きました。

入り口に船小屋があるんです。坪谷というところでしたけど、そこは縁側から魚が釣れるんですよ。津波でも上がるとすぐ流されるようなところに家を建てておられました。

奥さまはたいへん学校の成績がよくて。水俣病患者にカンパが届くでしょう。そのお礼の手紙は奥さんが書いていました。感心するくらい礼儀正しい、内容の豊かな、そして、いまの時勢を詳しく書いて、お返事係をしてくださっていました。

鎌田 教養豊かな方だったんですね。

石牟礼 はい。母屋に誰もいらっしやらないときは、船小屋をのぞいてみると、体が曲がったおじいさんが伏せておられました。明らかに水俣病でした。

一家全部水俣病だけど、名乗り出てきたのは家族のうちの3分の1。3分の2は黙って伏せておられました。あそこはどうして食べておられたんでしょうかね。

鎌田 お師匠さんの仕事は漁師ですか。

石牟礼 漁師でした。

鎌田 お師匠さんにご詠歌をどこで学んだんですか。

石牟礼 どこかで修行したっておっしゃってましたね。どこで修行しておられたのか聞けばよかったです。

鎌田 お師匠さんは、ご詠歌以外には経文とか、祭文とか、いろいろな唱えごととか、加持祈禱のようなこともされるんですか。

石牟礼 しておられました。

鎌田 では、そういう能力もあられたんですね。お坊さんの資格を持っていたんですね、きっと。加持祈禱ができるような真言宗のお坊さんでもあった。

石牟礼 在俗の坊さんだったと思いますね。

鎌田 そういう方が岬の突端のところに住んでいて、ご詠歌を教えていた。

石牟礼 そうですね。

## 綴り方の時間

鎌田 石牟礼さんの表現は、最初は短歌、それから俳句、詩と、散文に移る前に、そういう文学をされていますけど、石牟礼さんにとって短歌とか歌というのは、どういうものでしょうか。

石牟礼 母が畑で独り言を言ったり、草木に話しかけるときは、まるで詩みたいでしたからね。私もその中に入っていたんだと思います。

鎌田 お母さんが麦踏みをしながらか、麦や草や木に語り掛けているようなものが、そのまま音数律を伴って、五七五とか、そういう歌になっていった。それが石牟礼さんの歌うということの始まりですか。

石牟礼 はい。

鎌田 それは非常に古くからの女性たちの古歌というのか、古謡の伝統、島唄とか、そういう祈りの言葉の伝統の中に歌があるということでしょうか。

お母さんも巫女的な感じもしますね。お母さんは写真を見ただけでも、靈感というのか、祈禱とか、靈感とか、そういうことができるような方ですね。だから草木に語りかけたり、草木の音が聞こえたり、お話しできるという感覚があったのでしょうか。

石牟礼 はい。話していましたね。

鎌田 それは、『古事記』ができていく以前の古代的な感覚が、現代も日常生活の中で生きていたということですね。石牟礼さんが最初に何か書かれたのは、15、16歳の実務学校に行かれていますところですか。

石牟礼 もっと前かもしれません。小学生のころ、綴



石牟礼道子さんと母親のハルノさん(1970年ごろ、自宅前にて)

り方<sup>7)</sup>の時間が大好きでした。栄町にいた時代に、小学校1年生になって、綴り方の時間がありまして、最初に栄町のことを書いたと思うんです。

まだ馬車の時代でした。荷馬車が、大きなスギやヒノキの長い樹木を束ねて、馬車に引かせて、こずえの方が道にはみ出しますでしょう。そうすると、こずえがゆらゆら動くので、危なくてかなわん。それで地面に下ろして、根元を荷台にくくりつけて、とことこ引いていくんです。すると、馬のひづめの音と、葉っぱを付けたこずえが地面を擦っていく音がするので、スギの木を運んでいるなと思ってそばに行きましたら、こずえがぱちっと私をなぎ倒したんです。とても痛かった。ぶっ倒れて、すりむいてけがをしました。泣いて帰りましたけど。

鎌田 それを小学校1年ぐらいのとき綴り方に書かれたんですか。

石牟礼 はい。そうしましたら、倒れたときに痛かったのはもちろんですけど、びっくりしたのが、書いてみたら、実際よりもなお強く痛みを感じたんです。それで、ものを書くというのは、こういうことだと思って、書くことにたいへん興味を覚えました。

鎌田 すごいですね。小学生のときの書き方と、大人になって、『苦海浄土』を含めて、石牟礼さんが文学を書くのは、まったく同じですね。私はいまのお話を伺って、石牟礼さんの小説の世界そのものだと思います。もう生まれつき作家だったということですね。

石牟礼 あはは。作家として生まれてきたんでしょうかね。

## 俳句について

鎌田 私は「磐根樹根立」、岩や草の片葉が言葉をしやべるといふ感性が、文学にとっても宗教にとっても、これからの人間生活にとっても、とても重要だと思っております。石牟礼さんはそのところをずっと小さいころから一貫して感じられたり表現されたりしていた。



草木のおしゃべりというのか、いろいろなものの声、語りというものを聞き取って、俳句や短歌や詩としてご自身の言葉にされています。

石牟礼 言葉になっているかどうか、怪しいものがございますが。

鎌田 短歌と俳句と詩の区別というのは、石牟礼さんの中ではあるんですか。

石牟礼 あまりないですね。

鎌田 では、自然に五七五になったり、七七がくついたり、詩になったり、自在に変わっていくのですか。

石牟礼 はい。

鎌田 能の言葉も同じですか。

石牟礼 そうですね。

鎌田 では、散文も同じですか。

石牟礼 散文は、やや違うかもしれません。私の詩や俳句は難解だと言われて、俳句というよりも思想詩だという人もいます。そうかなとも思いますけど。ただ、私は、どうでも言えると思う。

鎌田 もちろん思想も入っておられますが、俳句の場合、いちばん短い言葉で世界を切り取り、つなげたり切り貼りしたりする。それは非常にダイナミックな、いちばん短い言葉でいちばん大きな世界を表現することができるものですから、俳句の言葉遣いは、また独自のものがあると思います。

石牟礼 難しゅうございますね、俳句は。

鎌田 そうですね、短いだけに。だけど、うまくいくと、ものすごく広がりのある宇宙を表現できますよね。

石牟礼 最近も「花ふぶき生死のはては知らざりき」。

鎌田 「花ふぶき生死のはては知らざりき」。いい俳句ですね。ご詠歌の世界みたいです。この俳句は、いつごろつくられたんですか。

石牟礼 そんなに昔ではないです。

鎌田 その花ふぶきは桜ですか。

石牟礼 いちおう桜です。ここの玄関にコケの花が咲いているんですけど、ご覧になりましたか。

鎌田 はい、きのうお聞きしたので、帰りがけに。

石牟礼 きれいですね。それで、地震を結びつけて、コケの花が震えて地震が来たというような俳句にしようかと思っています。コケの花が、あんなにきれいに咲いているのを初めて見ました。

鎌田 俳句はそんなに考えてつくられるんですか。

石牟礼 すぐに、ぱっと出る場合もあります。

九重高原の奥に「泣きなが原」<sup>8)</sup>という地名があります。これを俳句にしたいのですが、難しいです。

鎌田 地名そのものが物語性を持っていますね。何か古い伝承があるんでしょうね。

石牟礼 あると思います。

鎌田 『古事記』の中に、イザナミノミコトが亡くな

ったとき、夫のイザナギノミコトが泣いて、泣いて、そしてナキサワメ<sup>9)</sup>という泣く神さまが出てくるんです。葬式のときに、たぶん熊本もそうだと思うんですが、お茶わんをばんと割ったりして泣く女性がいますね。そういうものの原形的な存在がナキサワメなんです。泣きなが原というの、そういう神話の伝説と結びついているような気がしますね。

## 泣きなが原と朝日長者伝説

鎌田 [翌日]きのう最後に、泣きなが原の俳句をつくりたいとおっしゃっていました。ホテルに帰ってから、大分県の湯布院から友人が来たので聞いてみたんです。すると、泣きなが原という言葉は知らなかったけれど、長者原というところがあると。それで調べてみたら、朝日長者伝説という物語がありました(コラム参照)。

石牟礼 初めて伺いました。

鎌田 それを読んでいて、水俣病の問題にも、日本国中に残っている長者伝説にも、いろいろな意味で通じるものがあると思いました。

昔から言い伝えられてきた物語で、栄えて没落していくということがどういう問題を含んでいるか。また一族の中から犠牲者を生んで、その悲しみを救うために、観音さまとか野仏とか、そういうものを人々がつくって大事にした。本当に『苦海浄土』と通ずるお話だなと思って、今日はそれをお伝えしたかったんです。

石牟礼 初めて由来が分かりました。

鎌田 石牟礼さんは泣きなが原というところがあるということは何で知られたんですか。

石牟礼 俳句の先生が大分県と阿蘇との境目あたりの村におられて、その先生や皆さんは泣きなが原が好きで、よく泣きなが原に行つて句会をなさいます。

鎌田 それで石牟礼さんも何度か行かれたんですか。

石牟礼 1度だけ、皆さんに連れられて。

鎌田 九重山の麓になりますか。

石牟礼 中腹あたりです。秋になってお月さまが出るとススキの穂が月光に波打っているんです。ただ行くだけで幸せ。でも、いまのお話を知っている人は誰もいらっしやいませんでした。

穴井<sup>あないふとし</sup>太さんが主宰されている「天籟<sup>てんらい</sup>句会」に時々招かれて行きまして、たぶん水俣病の話をしたんだろうと思います。ついでに私も俳句をつくって出しました。鎌田 「籟」は響きとか声という意味ですね。いい名前の句会ですね。「サークル村」<sup>10)</sup>時代からの友人の方ですか。

石牟礼 友人というか、あちらが先輩ですけど、よくしてくださつて。「サークル村」にも行きましたし、天

籟句会にも招かれて行きました。

穴井さんが『天籟通信』という雑誌を出しておられまして、それに時々、私も出していました。また、新聞に原稿を書いたりするときに題名を俳句で書いたりしていましたが、いつの間にか、私がいたずらごころであちこちへ出した俳句を集めてくださって、ある日突然、「石牟礼さん、ご覚悟召されよ」と言われて、「句集をつくりましたよ。もう引っ込みはつきません。嫌だとおっしゃっても、もうできました」とおっしゃって持ってこられました。鎌田 その句集のタイトルは何だったんですか。

石牟礼 『天』という題名です。そして皆さんが、お祝いとして泣きなが原へご招待してくださいました。

鎌田 そのときの印象が強く残っているんですね。

石牟礼 はい。もう30年ぐらい前の話です。

鎌田 30年前の記憶も含めて、いま泣きなが原という地名を使った俳句をつくりたいということですね。

きのう最後にナキサワメという女神の話をしました。私の中では、泣きなが原と『古事記』の物語のナキサワメがつながって、泣く女性たちや、葬儀、死と結びついて泣く象徴的な出来事が、いろいろな意味で日本人のこころの中に、あるいは世界中のさまざまな伝説の中にあるんじゃないかなと思って、とても印象に残りました。

石牟礼 私も感動しっぱなしです。

鎌田 石牟礼さんが最初、歌人から出発して、その後俳句もしばしばつくられていて、映画の『花の億士へ』



泣きなが原(提供:松尾俱子)

でも「祈るべき天と思えど天の病む」など、俳句が非常に印象的に使われていますね。

石牟礼 私は俳人ではなかったのです。いまも俳人ではないですけど。

鎌田 でも、素晴らしい俳句をつくれるじゃないですか。

石牟礼 いやあ。天籟句会で酒盛りになったとき、「いまから石牟礼さんのことを俳人と呼びます」と皆さんから冷やかされて。私はうれしいやら、感動するやら。歌人のグループとはちょっと趣が違う。

鎌田 俳人と歌人の違いを石牟礼さんはどう感じていますか。

石牟礼 短歌の人たちは情緒的です。俳人は何かすきっとして。

鎌田 私なんかは、松尾芭蕉もそうですけど、俳句のほうに非常に宇宙的な感覚、それこそ天の感覚という

#### コラム

九重村に朝日長者と呼ばれる大金持ちがいた。ある年、日照りが続き、長者が雨乞いのお祈りをしたところ雨が降り始めた。村人たちは喜んだが、実は朝日長者は龍神様に、雨を降らせてくれたら3人娘のうち1人を差し出すと約束していた。3姉妹はそれぞれ自分が犠牲になると言ったが、結局、末娘の千鳥姫が懐に観音像を抱いて男池に行った。龍神さまに祈りお経を読むと大蛇が現れ、千鳥姫を飲み込もうとしたとき、観音像が大蛇の口に飛び込んだ。すると大蛇は、「私は朝日長者の下で姥をしていたが罪を犯したため大蛇の姿になった。観音さまのお慈悲とあなたの孝行心によって救われた。あなたはこれから白水川に沿って山を下りれば幸せになる」と言って姿を消した。千鳥姫は言われるとおり山を下り、和久見長者の息子に見初められて結婚する。

一方、朝日長者はますます栄えておごり高ぶるようになった。長女の豊野姫に婿を迎えてお祝いをしたとき、鏡餅を的にして矢を射ると言い出した。まわりの者は神罰を恐

れて止めようとしたが、長者はそれを聞かず、矢を放ってしまう。矢が餅の真ん中に当たったと思うと、餅は白鳥になって飛び去った。一同は、白鳥は長者の氏神、白鳥神社のお使いに違いないと思う。これをきっかけに、長者の家運は傾き始める。

朝日長者は、財産を山に隠そうと思い、人夫を呼んで穴を掘らせて埋めた。そして、穴を掘った人夫たちを口封じのために毒殺した。それ以来、長者の家にはたたりが起り、長者屋敷はさびれ、長者も病に倒れ、7日間苦しんで死んでしまった。

豊野姫と次女の秋野姫は、妹を頼って泣きながら歩き続けた。そこでそのあたりを「泣きなが原」という。二人は峠にたどり着いたが、そこで息絶えてしまった。いま、その近くに粗末な二体の石の墓がある。土地の人はこれを豊野姫と秋野姫の墓だといって大事にしている。(橋本邦雄「大分の伝説」を要約)

のを感じるんです。短歌には、大地とか人間のこころを感じます。

石牟礼 ああ、うまいことをおっしゃる。

鎌田 短歌は七七でこころが出る。だから大地的というか、人間的なものが短歌で、どっちかという、天の声に近いものが俳句だなという感じがします。

石牟礼 そういう感じがしますね。両方とも魅力がありますけど。

## 狐の話

鎌田 狐がたいへん好きですね。狐がいる「しゅり神山」が登場したり、狐になりたいとか。どうして狐が好きなんですか。

石牟礼 うちには年寄りたちがよく遊びに来て、ご飯を食べて、「ここがいちばん極楽じゃ」と言って、ごろりと横になって昼寝をして帰っておられた。そのお年寄りたちが集まられると、必ず化け物のお話をなさる。その化け物の正体はどうも狐らしい。いちばんおもしろかったのは、お隣のおじさんが「わしが見れば、どこの狐か分かる」と。

鎌田 狐の正体を見分けることのできるおじさんがいたんですか。

石牟礼 正体だけじゃなくて、人間でもアメリカ人と日本人の顔が違うのと同じで、狐たちも、どこの狐か、わしが見れば分かると。そして鳴き方も声も違う。

鎌田 鳴き方に方言がある。すごいですね。

石牟礼 海に面している大廻りの塘<sup>うまわ</sup>という川口の土手がありました。その大廻りの塘に行く、と、狐たちが遊びに来ている。それを見れば、どこから遊びに来た狐か分かる。それで、狐が互いに「今日はどこ行きな」ぐらいのあいさつはすると。

鎌田 へえ。狐のお話がわかる。私は『苦海浄土』を妻に読んで聞かせてもらったんですね。そのときに妻は『苦海浄土』を読みながら15回泣いたんですよ。私は左目の網膜剥離の手術をしているので泣いてはいけなくて我慢していたけど、5回泣いたんです。2人がいっしょに泣いたのが、狐が出てきて対岸の天草の方に渡っていくときに、お金がない。お金がないけど渡っていいかというふうに、漁師さんとやり取りする場面です。そのときの狐に対する情愛がよく描かれていて、その狐も優しい、律儀な狐で、そのお話は染み込んできました。

実は妻は狐が大好きで、家にも狐の像を置いてあるんですよ。2人ともあの狐の場面に感動して、本当にいい小説だなと話し合いました。あれは実際にそういうお話を聞いたんですか。

石牟礼 聞いていましたね。漁師さんたちは、雨の日

とか嵐の日とかは海に出られませんよね。そういうときはよくうちに集まってきて、焼酎を出しました。そうすると、面々に物語をつくってこられるんです。

鎌田 ストーリーテラーですね。語り部。

石牟礼 語り部。「今日の話は華<sup>はな</sup>じゃったな」とおっしゃる。語りの名人たちがいますから即興的につくって話せる。あるいは体験したのかもかもしれません。それを子どもの私は聞いているんです。語る人はもう話の中に入ってしまっておられた。だから迫真的ですよ。

鎌田 それは寄席や吉本新喜劇とかよりももっともとおもしろい、最高の機会ですね。月に何回ぐらいそういうことがあったんですか。

石牟礼 月に1回以上。母もいそいそもてなして。

鎌田 何人ぐらい集まってくるんですか。

石牟礼 2、3人だったり、4、5人だったり。話上手な人が来るときは、「今日はあの人<sup>あの人</sup>が来なさるからおもしろかぞ」と言って母はもてなすんです。

鎌田 それが記憶に非常に鮮やかに残っていて、その中のひとつのお話が『苦海浄土』の中の狐の話になっているわけですか。

石牟礼 はい。狐の穴が発破で壊されて、それで天草に戻ろうかということになって、大崎<sup>うきざき</sup>ヶ鼻のあたりから漁師さんが舟を出すときに、狐たちがやってきて、「すみません。舟賃がございませぬが、戻れば働いて返しますけん、連れていってくださいませぬでしょうか」と頼むのです。

鎌田 因幡<sup>いなば</sup>の白兔の神話がありますね。因幡の白兔はサメをだまして、上をとんとんと跳んで向こうへ渡っていくんだけど、このお話は、狐さんが人間の漁師さんに、「ちゃんと後で返しますから」という。

石牟礼 「必ず働いて返しますけん。いまはお金、持ちませぬ」と言って頼んだら、「銭はいらんぞ」と言って乗せて行った。中には、木の葉でなくて本当のお金をどげんかして持ってきた狐もおったと言っていました。

鎌田 おもしろいですね。私は石牟礼さんの文学や思想に非常に共感するんですけど、いちばん根底的なものは、人類が持っているエゴイズムとか、いろいろな業み<sup>わざ</sup>たいなものも描くと同時に、本当の祈りというのは生類全体に向けられている、ここが肝心なところだと思っただけです。

小説の中にも、さまざまな物語の中にも、狐や狸、いろいろな小さい動物たちが人間と同じように、あるいは人間以上に、切なく、生き生きと語られている。その生類に対する思いというものが、小さいときから、いまのお話のように、生きていたんですね。

石牟礼 はい。本当に狐になりたかったんですよ。なりたいたいと思えばなれるかと思って、お尻をなでてみる

けど、しっぽがなかなか生えてこない（笑）。

鎌田 それは5歳ぐらいのときですか。

石牟礼 5、6歳から7、8歳ぐらいまで。とんとん村に最初に住み着いたクロダさんというおじいさんは、若いときに狐に化かされたことがある。祝言に招かれて行って、したたか飲まされて、お土産を重箱に詰めて持たされて、丑三つ時ごろ、大廻りの塘を一人で帰りよったら、美人の女の人に化けた狐が話しかけてきた。いろいろ相手をしているうちに眠り込んでしまった。朝方、寒いので目が覚めて、俺はどこにいるかなと思ったら、大廻りの塘だった。そこらあたりに食べられた重箱が散らかっていたそうです。うちの者たちは、帰ってこないのを心配で迎えに行ったら、ぼう然として探しものをしておられた。その話は村中が知っていました。

## 未来の希望

鎌田 最後に、石牟礼さんは未来に対してどういう思いを持たれていますか。

石牟礼 差別を受けた人、深く傷ついた人たちがたくさんいますよね。未来は、そういう人たちの中に、むしろ希望があると思うんです。

鎌田 水俣病など、いろいろな差別を受けてきた人たちの中にこそ未来の新しい何かを切り開いていく力と希望がある。

石牟礼 それが生まれるだろうと思います。日本列島はコンクリート詰めになっていますから、表面は息も絶え絶えですが、この前の地震で、底の方が割れ、深い地殻の底が動くだろうと思いますね。

鎌田 江戸時代の人は地震に「地が震える」という字を当てないで、「地が新たになる」「地新」という字を当てて、世直りの1つの兆しだと考えたそうです。

私も、その江戸時代の庶民の捉え方にすごく共感できるんです。地震というのは、人間世界に災害をもたらすだけではなくて、土地の中から新たによみがえらせたり、生み出したりする力があるんだと。

石牟礼 最近、しきりに地震が起きているようですね。

鎌田 地震も増えました。竜巻も、台風も、集中豪雨も、増えました。気象が異常ですね。天の声も、地の声も、植物たち、動物たちの声も、みんな物狂いの状態に入ってきていると思う。狂いながらも、先ほど言われたように、希望のあるところへ、その先へ、つなげていかなきゃいけないと思うんですよね。

石牟礼 そうですね。

鎌田 最後に感謝の気持ちで、石笛とほら貝を吹いて風の又三郎のように帰りたいと思います。

（石笛とほら貝吹奏）



鎌田 ありがとうございます。

石牟礼 ありがとうございます。

\* 撮影・取材協力：金大偉

（2014年9月18-20日、熊本市にて）

## 編集部注

1) **チツ** 新日本窒素肥料株式会社（1965年チツ株式会社に改称）水俣工場がメチル水銀を含んだ廃液を未処理のまま大量に不知火海（八代海）に廃棄したため水俣病が引き起こされた。

2) **とんとん村** この土地に最初に住んだ兄弟の1人は動物の皮をはいで太鼓を作っていた。太鼓の皮を叩くととんとんと音がするのでとんとん村と言われるようになったという。

3) **しゅうりりえんえん** 「しゅうりりえんえん／しゅうりりえんえん／わたいはおぎん きつねのおぎん／しゅり神山のおつかい おぎん」で始まる作品。『不知火——石牟礼道子のコスモロジー』に「しゅうりりえんえん、という言葉は、もちろん辞典にはありません。辛い世界から出てくるための呪文というか、祈りを長い間やっていたら、こういう言葉が出て来ました。……本当に苦悩の深いものほど、しゃべらないのだから、空の奥に赤い花のように咲いているだけだとわたしは思うのです」とある。

4) **しゅり神山** チツの工場の裏の明神の手前の山。位の高い狐のおしゅらさまをはじめ狐や狸、妖怪が棲む。

5) **湯出** 水俣市街地から国道117号線を約8km山間部へ入った温泉郷。湯の鶴とも書く。

6) **ストン節** 大正13年（1924年）につくられたこっけいな俗謡で、昭和のはじめまで流行した。

7) **綴り方** 作文のこと。

8) **泣きなが原** 大分県玖珠郡九重町の涌蓋山の麓にある草原。

9) **ナキサワメ** 妻のイザナミを亡くして泣くイザナギの涙から化生した女神。『古事記』では泣沢女神と表記される。

10) **サークル村** 1958年、谷川雁、森崎和江、上野英信らが、労働者を表現によってつなぐことを目指して筑豊・中間で立ち上げた自立共同体。石牟礼道子さんも結成に参加し本格的な文学活動を開始した。

11) **大廻りの塘** 不知火海に面して大きくまわっている堤で、両側を深いススキが囲っていた。石牟礼道子さんは子どものころここで遊ぶのが大好きで、ススキの草むらに入って狐になりたいくて「コン、コン」と鳴いたりしていた。